

佐賀龍津寺の黄檗僧、月海は佐賀を離れ、57歳頃から京都の寺院周辺などで本格的に煎茶の販売を始めた。一般庶民に売茶活動を行う中で、親しみをこめて売茶翁と呼ばれた。文人との交友も広がり、同時代及び後の世代に深い影響を及ぼした。現代においても、全日本煎茶道連盟が売茶翁没後200年に百席茶会を行い、没後250年には顕彰碑を京都の鴨川に設置するなど現代の煎茶道界においても売茶翁への尊敬の念は厚い。売茶翁に関する先行研究としては、通史的研究や『売茶翁偈語』などの訳書などがある。他にも売茶翁のサロンやネットワークに関する研究も見られるが、売茶翁の煎茶席そのものの解明は必ずしも十分にはなされておらず、研究課題のひとつと考えられる。煎茶席は、どのような目的で設けられ、周囲の文人たちから売茶翁へはどのような支援があったのかを明らかにすることの意義が見出される。また、売茶翁の煎茶席の実態を明らかにすることは、売茶翁を師事する現代煎茶道にとっても有用であると考えられる。分析視角としては、「雅俗」の視点をを用いる。「俗」を「金銭的価値を優先し、身分や社会的地位や技術的な優劣だけで物事を判断すること」と捉え、「俗」の視点とその対極にある「雅」の視点から迫ることとする。

売茶翁は『梅山種茶譜略』や『対客言志』において、かつて自身が身を置いた禅界は俗化していると主張した。そのような状況下での煎茶席の目的は、政治や経済についての情報交換や人的コネクションの形成といった俗事ではなく、煎茶席を通して人間世界にも仙界へと行く道があることを人々に知ってもらうことであり、煎茶席を通してなんらかの力を創出することであった。また、煎茶席は、「俗」にとらわれない精神を思索するため、寺院など風光明媚な名所や自然豊かな場所に設けられた。人間を超越した歴史や自然という普遍を感じられる場において思索することであり、「雅」を志向するものであった。一回一回の席に多くの人々が参加した訳ではなく、お互いが顔をあわせて、語り合うことのできる規模であり、密度の濃いものを目指していた。

売茶翁の茶や茶道具については、長崎訪問時に清人の茶を学び、茶葉については宇治に住む永谷宗円を訪ね、良品を求めた。売茶翁が用いた茶道具は『煎茶略説』、『煎茶早指南』、『売茶翁茶器図』にも取り上げられているが、高級なものを必死になって集めようとしている姿はない。むしろ、後世の人が自分の茶具を商品として扱うことを警戒しており、金銭的価値を優先している姿は見られず、この点で「俗」を離れていると判断できる。

売茶翁は自活できていたという訳ではなく、周囲の文人から支援を受けている。しかし、生きていく上での最低限の住居や食糧である。精一杯生きているその言動から、身分や金銭など「俗」の要素を意識的に除去する姿が伝わってくる。また、支援した人々も煎茶席に参加する機会を得ることで、パトロネージは双方向となり、パトロネージの存在をもって「俗」であるとはいえない。煎茶席の対象者には身分や貴賤の差はなく、この点でも「俗」にとらわれていない。そして、席は仙界を想起させる場に設置し、固定化せず、様々な場所に設けた。売茶翁は自分自身の居住地をも変動させ、固定した場所を消そうとしていた。生き方そのものが「俗」を離れることを志向しており、それが煎茶席にも反映していた。仙界へと誘う仕掛けとして風雅な場所を用意し、席の化学反応を狙い、煎茶席を仙界への入口として機能させ、自身がコーディネーターとして、参加者のそれぞれの力を発揮させるように働きかけた。売茶翁の煎茶席は、場所、規模、参加対象者、進行方法、精神性、素材である茶葉や茶道具について「俗」を離れることを志向しており、社会的身分や金銭的価値などの「俗」にとらわれない精神、つまり「雅」が確認できる。